
アニマル ワンダフルライフ

鬼蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマル ワンダフルライフ

【Nコード】

N0395F

【作者名】

鬼蝶

【あらすじ】

ある日を境に、人が動物に見えてしまう様になった、主人公の斎宮侑生。次々と襲いかかってくるハプニング（？）に、侑生は耐えられるのだろうか？

第1話 俺はこんな世界、嫌だああ!! (前書き)

日本語が変だったり、違和感があったりするかもしれませんが、そこは許してやって下さい。

第1話 俺はこんな世界、嫌だああ!!

どーしてなんだ？どうして、動物がいるんだよ？

俺は電車から、真っ先に降りた。

「やってられつか、こんな生活!!」

俺の名前は、齋宮 侑生。高校1年生だ。

最近、人が動物に見えてしまう。中学校までは、普通に人が見えていたんだが……。頭でも可笑しくなったんじゃないか？と、思いの人も居ると思うが、本当なんだよ。ほら、今も駅の女子トイレから、カバが……。

「何、見てるのよ!!」

「ああ、すいません。」

しかも、ちゃんと喋る。さっきの人は、声と歩き方からして、45歳位かな……。

「って、学校に遅れる。」

推測してる暇はないと、俺は急いで学校に向かった。

「いつになったら、元の世界に戻るんだ？」

「おい、齋宮!!」

……は？

馬だ。馬がこっちに向かって走ってくる。

「うわ、来るな。」

俺はとつさに、頭を伏せた。

「おはよう!!……何、してんだ？」

馬が2本足で立ってるうとうとう。

「お、おはよう。何でもないよ。」

いっけね……。平常心、平常心……。って、誰だっけ？

「えーと、どちら様で？」

馬だ。

「何、言ってるだよ、友達の名も忘れたのか？」

馬だ、馬だ、馬だ、馬だ、馬だ。

「ああ、宗村もとむらだよな。分かってる、分かっていると。」「

青樹あおきだけど。」「

シーン……。

ま、間違えたー！ー！ー！！

どうしよう。沈黙が……。

「冗談だって！！冗談位、軽く受け止めるよ。な？」

「……うん。」「

落ち込んで。これ、絶対に落ち込んで。鼻がモヒモヒしてるもん。

あああああああ、コイツ面倒くせー！！超、面倒くせーよ！！
声だけで分かるかつーの！！

第2話 やべえ、宇宙人が来たんだけど！！

「まったく、なんで朝からこんな、疲れんだよ。」

俺は屋上で、昼食を食べていた。

「斎宮、聞いたか？」

もちろん、馬・・・いや、青樹も一緒に。

「何を？」

青樹は柵から、運動場を見下ろした。

「今日、美人の転校生が来るらしいよ？」

「美人だ？」

なんだ？ゴールデンレトリバーでも、来るってか？

「お、来たみたいだ。」

あんまり、期待しない方がいいだろうな・・・。

「すげー！！美人だ！！」

へえ・・・ま、顔だけでも拝おがんどいてやるか。

「青樹、そんなに鼻息を荒くすんな。鬣たてがみなびが靡なびいてるぞ。」

・・・って、はあああああ？

キ・リ・ンですか？それはさすがに、予想もしなかったな・・・。

「そんなに、美人か？」

「な・・・美人じゃねーか！！お前の目は、節穴か？」

その言葉、そっくりそのまま、お返しします！！

「俺、教室に戻るわ。」

「おお、オレはもう少し見てから、戻るよ。」

「へーい。」

俺はカラ返事をしながら、階段を降りた。

「はー、アイツと居ると、ホント疲れる。」

芯は良い奴なんだけどな。

「あの・・・。」

・・・なんて事を考えていると、後ろから声が掛った。

今度は何？今度こそ、犬・・・とか？

「何ですか？」

振り返ると、そこには女の人が立っていた。

「う・・・嘘、人間？」

「いいえ。」

黒くて長い髪に、形の整った顔。あまりの美しさに、見とれてしまった。

この人こそ美人って、言うもんだ！！この美しさ、青樹に見せてやりたい。

つて、そうじゃなくて・・・。

「今、なんて？」

「私は人間では、ありません。」

「え・・・。」

人間じゃない？

「宇宙から来ました。」

「はあ、宇宙です・・・かあああああ？」

宇宙人？え、どうしよう、宇宙人まで見えるようになったのか、俺？

第3話 SF的な話になってんですけど？

「宇宙から、あなたを殺しにきました。」

「こ、殺し？」

女の方はだんだんと、俺に近づいてくる。

逃げろ！！

俺は戸惑いながらも、走って逃げた。女の方はすごいスピードで走ってくる。

「なぜにご乱心ー！？」

と、叫びながら、全力疾走！！

あの人・・・なんか、目からビーム出しそうなんだけど。

女の方の目に、光が集まってくる。

「ま、マジですかー！？」

野次馬がたくさん居る中、俺は職員室に向かった。

「つか、見てねーで助ける、野次馬ー！！」

誰も助けてくれないのは、どうして？（話を作るのが、楽だからです。）

「ふざけんなよ、筆者ー！！」

ガラッ

「先生、助けてー！！」

誰も居なかった。

「どうしてー！？」（話を作るのが・・・以下略）

俺は運動場へ出た。女の方がビームを発射したところから、変な地球外生命物体が出てきている。

「ぎゃあああああー！！」

そうだ、青樹は？

俺は周りを見渡した。

「居たー！！青・・・！！？」

大木の下に、青樹とキリンが居た。

あの雰囲気は・・・。

「愛の告白とか、マジふざけんじゃねーぞー!!」

さつきから、叫んでばっかで、喉が痛い。

俺は決心した。すべての怒りを、この一発に懸ける。

「スペシャルアップパーカット!!」

右の拳が、女の人の顎の下に直撃した。

「うっ・・・。」

女の人は苦しそうな声を上げながら、地面に叩き付けられた。なんかもう、ちがう話になってねーか？

「人生で初めて、女の人をグーで殴ってしまった。」

でも、こんな簡単に終わるはずはない・・・と思ったんだが。しばらく経ったも、まったく起きてくる気配がない。

「死んで・・・はないよな？」

と、女の人首筋に触れようとした瞬間・・・

ペカー

空から、飛行物体・・・ぶっちゃけ、UFO^{ゆっふおう}が降りてきた。

第4話 目薬、いりますか？

「何か来たー！！」

俺は空から降りてきたUFOを凝視した。

ウーーン

変な音と共に、中から宇宙人（？）が出てきた。

「ツレテカエリマスネ。」

「へ。。。。」

開いた口が塞がらないというのは、こういう事を言うんだな。

「ツレテカエリマスネ。」

なんで2回、言った？

「ああ、どうぞ。俺の物でも、何でもないんで。」

女の人は宇宙人に抱えられ、UFOの中に。。。！？

ギロ！！

。。。おもつきし睨んでる！！おいおいおい、怖えーよ！！目、充血してんじゃん！！

「ひ。。。。」

女の人と宇宙人は俺を睨みながら、UFOで宇宙へ帰っていった。

「今までの、何だったんだよ！！」

俺は力が抜けて、へなへなと地面に座り込んだ。

「ん？前にも少し、似た様な事があった気が。。。。」

「斎宮ー！！大丈夫かー！？変な音したぞ！？それより、聞いて！

！告白が上手く。。。。」

俺はその声を聞いて・・・

「おっ前、ふざけんじゃねーぞ！！俺が一生懸命、宇宙人と戦っている時に！！」

キレた。

駆けてくる馬を蹴る！！ひたすら蹴る、殴る！！

「イテテ。。。何、すんだよ？」

「喋んな！！このクソ馬！！鬣をポニーテールにしゃがつて！！シヤレのつもりか！？ウケねーんだよ！！せめて、御河童おかっぱにしろ！！」

俺は日頃のストレスを全部、青樹にぶちまけた。

青樹の鼻血に、太陽の光が反射して辺り一面、キラキラしている。

「綺麗だな・・・。」

心が洗われていくようだ・・・。馬を殴るなんて、良くないよな。

俺は散々殴つときながら、血塗れの青樹をほつて家に帰った。（何が、心が洗われていく・・・だよ。）

「そういえば・・・あの宇宙人は、なんで俺を殺しにきたんだ？」

第5話 不良って、ボランティアするの？

俺って、可愛そうな奴だよな。宇宙人に殺されかけるなんて・・・。

「宇宙人に恨まれる様な事、したっけ？」

俺は自販機でジュースを買っているところだった。

「おはよう（おはよう）。」

おはよう・・・？

俺は声のした方に、振り返った。

「青樹・・・か？」

誰か分からなかった。だって、顔が包帯でぐるぐる巻きで、鼻にティッシュが詰め込まれていたんだぜ？・・・って、俺の所為なんだけど。

「えっと・・・昨日は悪かったな、色々と。」

「べふにひひつへはんふらひ（別にいいってあの位）。」

何言ってるか、分かんねえ。

「お、お詫びに奢るよ。何がいい？」

俺は罪悪感を感じ、せめてものお詫びとして、ジュースを奢る事にした。

「ひゃあ・・・ひゃはいひゅーひゅ（じゃあ・・・野菜ジュース）。」

「馬だから？」

「分かった。野菜ジュース・・・っと。」

「おい、ちんたらしてんじゃねーぞ。」

何処から、低い声がした。なんか、喋り方からして不良っぽい。今度は何か？ジャガーとかか？

俺は後ろを振り返った。

「あれ？何処に・・・？」

何かが足に触った。

「何？」

足元を見ると・・・

「か、可愛い!!」

ハムスターが俺の靴の上に、乗っかっていた。

この人絶対、いい人だ。不良だけど実は、海のゴミ拾いとか、募金とかしてるタイプだ。

「は、ひょうひまひえんひゃひ（あ、せうじま條島先輩）。」

「青樹、知ってるの?」

「ふん!!ひよのひゃっひょーへひひゃんふひょいふひよふふんはんほ、ひーはーはっへ!!（うん!!この学校でいちばん強い不良軍団の、リーダーだって!!）」

いちばん強い?

「ぷ・・・くく。」

やばい、笑いが抑え切れない。

「笑ってんじゃねー!!」

條島先輩はそう言い残して、その場から去っていった。

あ・・・また何か、起こったりして。

第6話 犬神様のおなーりー・・・！？

やっぱり・・・。

予想が的中した事に、溜息を吐いた。

俺は今、不良達に絡まれています。

「おいおい、兄ちゃん。よくも俺等のリーダーを馬鹿にしてくれたのお。」

と言つても、全然怖くないんですが・・・。

「おい、何とか言えや、我！！」

こんなに可愛いハムスター達を目の前に、怖がる人はそうそう居ない・・・と思う。取り敢えず、謝っとくか？

「申し訳、御座いやせんでした！！兄貴！！」

とても言つて措こう。面倒くさいし。

「だからもう・・・。」

帰らせて下さい。

「おお！！分かつてるやないか！！」
は？

「よし、気に入った！！俺の仲間になれ！！」

うわあああああああ！！余計、面倒くさい事になった。

「冗談やめええええええええええええい！！」

疲れた・・・。

なんとか逃れたけど、また来るかも。ハムスターって結構、足が速いんだな。

俺は家に向かっていた。

あ、犬が目の前を走って・・・ああ？

「思い出した！！」

人が動物に見える様になった理由。そうだ！！あの時・・・
回想

「今日から新学期か・・・。」

俺が道を歩いていた時だった。そう、空から……えーと、何だっけ？

ワン！！

そう、そう！！犬が降ってきた。
（ええええええええええ……。）

「・・・なんで犬が降ってくるんだ？」

俺はその犬を受け止め、其処ら辺にあつたゴミ箱に捨てた。そして
らゴミ箱の中から、いきなり手を掴まれたんだ。

「んだよ、この犬！！気持ち悪い！！！」

俺は驚いて、そいつの手を払い除けた。

「呪つてやるわ。」

犬が喋った！！

俺は夢でも見ているのかと、自分の頬を抓った。普通に、痛いんだけど。

「夢じゃ……ない？」

第7話 再び・・・目薬、いりますか？

犬が俺を、充血した目で睨んでる。

そうだ、此処だ。此処が宇宙人の時の（第4話参照）と似ているんだ。

「私は・・・。」

何だ！？また喋り出した！！

「わしは犬神と申す者じゃ。」

い、犬神だ？

「いいいいいい犬神がどうして・・・。」

「様！！！」

チツ（舌打ち）

「犬神様の様な人が、どうしてこんな所に落ちてこられたのですか？」

犬は俺を指差した。

「お前、さつき何をした？」

無視かよ。

「さつき！！！」

足でも踏み外したんだな。・・・何から？雲？

「捨てた。」

「そうだろう？この、犬神様を捨てたのだ！！！」

俺様キヤラかよ。てか、もうツツコむのも面倒くさくなってきた。

「あー・・・はい、はい。」

「これが、どういう事が分かっておるのか？」
知るかよ。

「動物虐待だ。」

「そーですね、すいませんでした。」

俺は呆れて、頭を抱えた。

「謝っただけでは、済まされんぞ！！覚えておれよ！？死ぬまで、

呪い続けてやる。」

犬はそう言いながら、空へと戻っていった。〈回想終了〉

・・・と、そういう事があって、そう。その次の日からだった、この世界が変わったのは。今思うと、あの犬は本当に犬神様だったのかもしれない。（信じてなかったんだ。）

俺は家に着いてすぐ、ベッドに横になった。

「あの犬捕まえたら、普通の日常に戻れっかな？」

俺は日曜日の朝、あの犬に会った場所に向かった。

「やっぱり、簡単には会えねえよな。」

ゴミ箱覗いたら、帰ろう。

パカッ

「どうも。」

俺は即座に、蓋を閉めた。

「・・・どうしよう。」

パカッ

「なんで、閉めるんじゃ。」

閉めた。

「マジかよ。」

やっぱり、今日は帰ろう！！

「なぜに、閉めるんじゃ!？」

犬が俺に、飛び掛かってきた。

「何もこんなに早くに、見つかる必要ねーだろ!!！」

「何を言う!! 楽させてやったのじゃ!! 感謝しろ。」

「どうせ、また捨てられたんだろ!？」

「・・・違うわい!!！」

凶星かよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0395f/>

アニマル ワンダフルライフ

2011年1月2日14時34分発行